

道徳の時間学習指導案

三次市立三良坂小学校

指導者 小原 智穂

- 1 日 時 平成25年11月15日(金) 第3校時
- 2 学 年 第4学年 男子10名 女子14名 計24名
- 3 場 所 4学年教室
- 4 主題名 ふるさとの自慢【内容項目4-(5)郷土愛】
- 5 ねらい ダムに沈む前に地域の人の願いで植え替えられた大樹「えみきじいさん」を新しい町の自慢にしたいと思う主人公の気持ちを考えることを通して、地域で大切にされてきた物やそれに込められた人々の思いに気付き、自分たちの郷土を愛する心情を養う。
- 6 資料名 「えみきじいさん」の引っ越し 【自作資料】
- 7 主題設定の理由

○ 自分の育った郷土は、自己の形成に大きな役割を果たすとともに、一生にわたり大きな精神的な支えとなるものである。しかし、現代社会では、多岐にわたる情報化社会の発達により生活様式が画一化し、地域性が失われつつある。また、「新しいもの」が好まれ、伝統や歴史のある変わらないものは、一応に「古いもの」として軽んじられる傾向がある。昔から変わらないものや地域の行事や伝統には、これまで受け継いできた人の思いが込められている。しかし、核家族化が進み、個人主義の考えが優先され、その思いは伝わりにくくなっている。人間が人間らしく生きていくためには、自分が育った郷土の変わらぬものや人の思いが、自分を支え育ててくれたことに気付き、それらを大切に、郷土を愛する心を育てることが必要だと考える。

4年生の発達段階では、様々な面で視野が広がる。行動面では、学校や自宅周辺であった活動の範囲が、地域全体へと広がり、地域の祭り等の行事に参加する児童が多くなる。精神面では、仲間意識が強いギャング・エイジの時期を少しずつ脱し、多様な人の考えや生き方に興味を持ち始める。徐々に視野の広がるこの時期に、地域の人々の生活や、文化、伝統に親しみ、それを大切にすることを育てる必要性を考え、本主題を設定した。

本資料は、三良坂町灰塚で実際にあった話を資料化したものである。灰塚は平成18年に竣工した灰塚ダムの建設に伴い、ダム湖に沈んだ町である。灰塚ダム建設に伴い、平成5年に生活再建地「のぞみが丘」が建設され、142戸の住宅、小学校、寺社が移転した。その際に樹齢500年に及ぶクスノキ「えみきじいさん」も移植された。移植することで枯死も懸念されたが、住民の絶ったの願いで移植された。当時の話を聞き取り、ダム湖に沈むふるさとへの深い思いを資料化したものである。

○ 本学級の児童はこれまで総合的な学習の時間において、三良坂町のホタルの生息実態調査や馬洗川の水生生物調査を行い、三良坂町の環境について学んできている。また、社会科では、三次市の昭和47年の水害や灰塚ダムなどの学習を通して、郷土について学習をしてきており、自分たちの地域について関心を持ちつつある。

アンケートの結果から、100%の児童が命を大切だと答えている。また、自分以外の命を大切だと考えている児童も96%である。身近な生き物や動植物への意識は、88%の児童が、大切にしていると回答している。特に「とてもあてはまる」の項目において、1学期は27%だったが、2学期には72%となり、49ポイントの向上が見られた。向上した理由として考えられるのは、馬洗川で実施した水生生物調査や蜚の実態調査等の体験的な学習や社会科の環境に関わる学習と道徳の時間を関連させて考えさせたことが、身近な環境や生き物大切にする意識につながったと考える。自尊感情では、92%の児童が自分には良いところがあると回答しており、自分の良さや友達に認められているという意識の向上も見られる。

地域については、好きな場所としては、児童の興味の深い商店街が33%である。次いで川が30%を占めている。児童がよく行く図書館や美術館が17%、自分たちの学校が12%になっている。自分が大切にしていきたいものという項目では、地域の祭りが34%、地域の自然が3

3%となっている。三良坂の伝統であり、6年生が演じる沖江田楽が25%、次いで学校が12%である。8%の児童が人の命や生き物の命を挙げている。

- 指導にあたり、導入では写生会に描いた校内の木の絵を想起させ、誰が描いた木の幹が一番太いかをクイズ形式で質問し、幹が6mもあった「えみきじいさん」の大きさを実感としてとらえさせ資料への動機付けとしたい。

授業展開前段では、「えみきじいさん」と灰塚ダム建設に伴い水没する町について考えさせたい。主人公を「えみきじいさん」の所へ連れて行き思い出を語る祖父の言葉から、「えみきじいさん」を祖父が大切に思ってきた経緯から「えみきじいさん」と祖父のつながりをとらえさせたい。そして、その思いが、「えみきじいさん」を新しい町の中心に移植したいと願う祖父の気持ちの強さにつながっていることをとらえさせたい。また、移植することで枯死してしまうかもしれないのに、移植を望むのかと疑問に感じる主人公の心情を素直に捉えさせたい。

中心発問に特に深く関わる発問として、移植される「えみきじいさん」を祈るように見つめる町の人々の姿から「えみきじいさん」に思いを込めているのは祖父だけではないことに気付かせ、町の人々が「えみきじいさん」の移植を願うのは、なぜなのかを考えさせたい。さらに、人々の思いに気付くことが、主人公が自分の町に対して愛着を感じ始めるきっかけにつながっていることに気付かせたい。

中心発問では、先生に新しい町の自慢を質問された時に、なぜ真っ先に心に浮かんだのが「えみきじいさん」だったのか理由を考えさせたい。

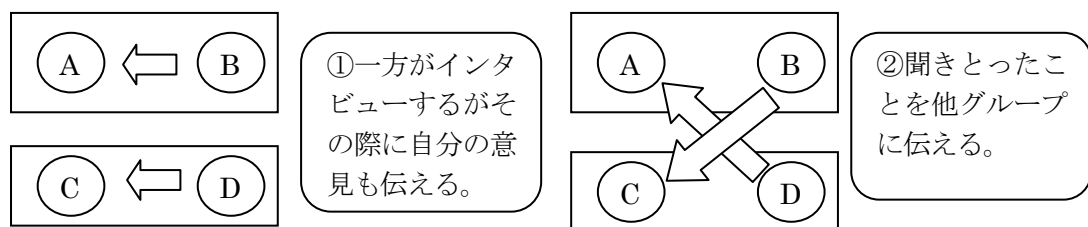
基本発問の話合いは、ペアでパートナー・インタビューを(※)を取り入れたい。この話合いは一方がインタビュアーになり、相手に主人公の心情を問わせ、さらに違うペアに聞取った内容を伝える方法である。中心発問では、主人公が「えみきじいさん」が心に浮かび、まっすぐ手を挙げた理由をワークシートに記入させ、全体で意見を交流し個々の価値を高めると共に友達の意見から新たな価値の気づきや向上をさせていきたい。

内省化は、三良坂町の自慢を想起させるような問いかけとしたい。

終末では、「えみきじいさん」の引越しの様子の映像やレインボープログラムの主な活動である総合的な学習の時間の活動を重ねあわせて自分たちの郷土について考えさせたい。また、本校は、来年度で廃校となり、現在の中学校横に新設される。今の三良坂小学校の校舎や校庭の木々は、「えみきじいさん」と同じように地域の人々の心のよりどころであることに気付かせたい。三良坂町全体としての郷土や身近な郷土への愛着を感じさせながらのオープン・エンドとしたい。

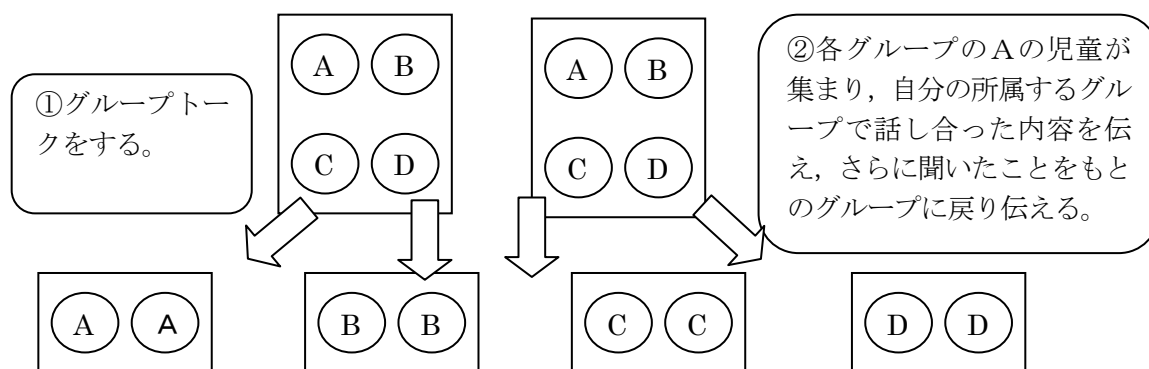
※パートナー・インタビュー

ペア（もしくは3人組）で一方が、もう一方にインタビュー形式で、質問をする。インタビュー側は聞き取った内容を他のペアのインタビューされた児童に伝える。



高学年でのジグソー法の話合い活動につなげていくステップとする。

※ ジグソー法



8 道徳学習プログラム（レインボープログラム）

レインボープログラム（2学期2期）の主となる総合的な学習の時間の体験的な学習活動は、「馬洗川探検隊～私たちの川を守ろう～」である。1学期の総合的な学習の時間に実施した三良坂町のホタルの生態調査及び水生生物調査を学習発表会の表現活動に生かしていく体験的な学習活動となる。この表現活動を道徳の時間と関連させていく。

この体験的な学習活動を通して、健全な自尊感情を育てる内容では、劇を創りながら、自分の長所を伸ばし、友達の良さも認め、互いの長所を伸ばしていこうとする意欲をもたせたい。さらにコミュニケーション力として、一つの劇を作り上げるためには、相手に対する思いやりの気持ちをもって活動を進めなくていけないのだという思いに気付かせたい。

本時は、学習発表会で演じた劇の内容にも関連する郷土愛の内容項目である。双方向の所属感を高めるために、自分たちの住む三良坂町の歴史を知り、町を大切に思ってきた人々の思いを考えることを通して、郷土を大切にしていこうとする心情を養っていききたい。

児童のアンケートの結果では、「地域への関心」「地域のために何かしたい」という意識は低い。また、来年度をもって廃校となり、移転する三良坂小学校が地域の人々の心のよりどころあり、学校周辺の豊かな自然や見守っていただいた地域の人々の思いには気付かない児童も多い。

自分たちの身近な地域の人々の思いに立ち返らせる意味でも、地域のために尽くした人々について学ぶ社会科の学習や図画工作科で「心にのこったもの」で取組んだ校内の木々の絵画を関連させ、道徳学習プログラム「レインボープログラム」として、自分、仲間、地域の人や自然がつながりを統合して考えさせ、自分を支え育んでくれたふるさとを大切に、生きていこうとする生命尊重の意識へとつなげていきたい。

みんな、かけがえのない命

中心となる体験的活動：馬洗川探検隊～私たちの川を守ろう～（総合的な学習の時間）

○ 馬洗川を中心とした地域の環境について調べ、地域の自然を守る活動を自分たちの生活と結びつけて考え、全校に伝えるために表現方法を工夫し発表する。

①健全な自尊感情を育てる

【ねらい】

自分の課題に気付くと共に自分の良さを見つけることができる。

道徳の時間

「つくればいいじゃない」
（日本文教出版）

1—（5）個性の伸長

自分には得意なものが見つからない主人公が、友達と一緒に走る練習を続けることで、自分の良さに気付いたり伸ばしたりしていこうとする心情を養う。

【関連】

特別活動

「心に残る学習発表会にするために」

②コミュニケーション力を育む

【ねらい】

相手に思いやりの気持ちを持ち、進んで親切に行動することができる。

道徳の時間

「それからの 1000 羽鶴」
（禎子の千羽鶴より）

2—（2）思いやり

自分の病気が治るように折った折鶴の次に自分の家族の幸せを祈って鶴を折る禎子の心情を考えるを通して、相手の立場を思いやり進んで親切にしようとする心情を養う。

【関連】

国語科

「ごんぎつね」

③双方向の所属意識を高める

【ねらい】

地域の歴史に関心を持ち、良さに気付き、伝統を大切にすることができる。

道徳の時間

「えみきじいさんのひっこし」
（自作資料）

4—（5）郷土愛

ダムに沈む前に地域の人々の願いで植え替えられた大樹「えみきじいさん」を新しい町の自慢にしたいと思う主人公の気持ちを考えるを通して、地域で大切にされてきた物やその物に込められた人の思いに気付き、自分たちの郷土を愛する心情を養う。

【関連】

図画工作科

「心にのこったこと」

【関連】

社会科

「郷土を開く」

5月

10月～11月

2月

道徳の時間3の（1）生命尊重「つながってる」（日本標準）

特別活動 命のつながりを考える

道徳の時間3の（1）生命尊重「いのちのまつり」（東京書籍）
自分の命は、たくさんの人の命とつながっていることを知り、これからはがんばろうとする意欲を持たせる。

○ 期待する意識の流れ

自分の良さを伸ばしていきたいな。→周りの人の思いやりの心で広げよう。

→ふるさとの自然にも命があるんだ。→自分・みんな・自然、かけがえのない命を大切にしよう。

1 0 準備物 資料の絵・ワークシート・スライド

1 1 学習展開

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	支援 (○) と評価 (☆)
導入	1 学校の木の大さを考える。 【み…見つける】	○ 写生会で描いた学校の木で一番太い木は誰の木でしょう。	○ 身近な学校の木から資料のえみきじいさんの大きさを実感させ、資料への動機付けをする。
展開	2 「えみきじいさんのひっこし」を聞いて話し合う。 ① えみきじいさんの側でおじいさんの話を聞く高志の気持ちを考える。 ② えみきじいさんの引越しを聞いた高志の気持ちを考える。 ③ えみきじいさんの引越しの様子を見つめる高志の気持ちを考える。 【さ…さがす】 ④ 高志が、新しい町の自慢したいことを聞かれ、真っ先にえみきじいさんを思い浮かべた理由を考える。 【か…考える】	○ 「えみきじいさんのひっこし」を聞き、話し合います。 ○ えみきじいさんの側でおじいさんの話を聞く高志はどんな気持ちだったでしょう。 ・おじいさんさんは、えみきじいさんとの思い出がたくさんあるんだな。 ・戦争のころからずっとここにあるんだな。 ・おじいさんはえみきじいさんと別れたくないんだ。 ・えみきじいさんと別れるのは辛いんだな。 ○ えみきじいさんの引越しの話を聞き、高志はどんな気持ちだったでしょう。 ・植え替えが決まっておじいちゃんは嬉しそうだ。 ・植え替えて枯れることを心配しているんだ。 ・枯れるかもしれないのにどうして植え替えるんだろう。 ・植え替えても意味ないんじゃないかな。 ・公園だから遊ぶ物の方がいいな。 ・おじいちゃんは町の真ん中にえみきじいさんを植え替えたいんだ ○ えみきじいさんの引越しを見つめる地域の人の様子を見て、高志の胸がじんとなったのはどうしてでしょう。 ・こんなになってもえみきじいさんにいて欲しいのかな。 ・みんなえみきじいさんが公園に来ることを望んでいたんだ。 ・地域の人はおじいさんと同じ願いを持っているんだ。 ・みんな同じ思いなんだ。 ・ぼくもえみきじいさんに公園にいて欲しい。 ・えみきじいさんが頼もしい味方みたいだ。 ・何だか自分もうれしい。 ◎ 高志が、新しい町の自慢を聞かれた時、真っ先にえみきじいさんを思い浮かべたのはどうしてでしょう。 ・えみきじいさんにはみんなの思いがこもっている木だから自慢できる。 ・みんなの思い出もたくさんある木なんだ。 ・えみきじいさんがいればみんなが笑顔になれる。 ・えみきじいさんを大切にしていきたい。 ・ダムに沈んだ町の思い出が詰まっているんだ。 ・えみきじいさんがいれば大丈夫だ。 ・えみきじいさんがいると安心するんだ。	○ 資料は分割提示をする。 ○ えみきじいさんとの思い出を語る祖父の心情を汲み取らせる。 ○ えみきじいさんについての理解を深めさせる。 ○ 枯れるかもしれないのに植え替えを願うことに対する疑問を素直に出せるように投げかける。 ○ 祖父が新しい町の真ん中の公園にえみきじいさんを植えたいと強く思う気持ちを抑えておく。 ○ えみきじいさんに対する高志の思いが変化していることをとらえさせる。 ○ 高志の気もちが、地域の人の様子をみて、えみきじいさんを大切に思い始めた理由を考えさせる。 ○ 高志の心情の変化をとらえさせる。 ○ パートナー・インタビューをさせ、多様な理由を考えさせる。 ○ ワークシートに記入させ、発言し意見の交流を行う。 ☆ えみきじいさんを大切に思う気持ちや地域の人の思いの深さから地域を大切にしていこうとする気持ちに気付いている。 ○ 考えを発表し合い、自分と違う意見や良い考えだと思ふ意見に気付かせる。
閉	3 自分の生活を振り返る。 (内省化)		

	⑤ 今の三良坂町の自慢したいものについて考える。	○ みなさんが、三良坂町で自慢したいものは何でしょう。	○ これまでの学習プログラムに関連する活動を意識的に想起させ、自分の身の回りの環境や生活を振り返らせる。
終 末	4 三良坂町のスライドを観る。 【ら…くらしに生かす】	○ 三良坂町の人たちが郷土を大切にしてきた思いを振り返りましょう。	○ これまでの活動とダム湖に沈む前の灰塚町の写真や主となる総合的な学習の時間の学習活動の写真を構成して郷土について振り返らせる。

【資料】

「えみきじいさん」の引っ越し

川のそばに一本の木が立っていました。木の年齢は約500歳。幹に大きな穴が空いた年取った木でしたが、幹の周りは6m、高さは8mもある大きな木でした。この町の人たちは、ずっと昔からこの木を「えみきじいさん」と呼んで親しんできました。

この木を見上げていたらほっとして、笑顔になる…。「笑顔」の「笑みの木」の「の」を取って「えみきじいさん」と呼ばれるようになったのだそうです。

「えみきじいさん」は馬洗川にそそぐ上下川の川辺にどっしりと立ち、この町や人。根元を流れる川や生き物、枝で羽を休めていく鳥たちを見守ってきたのです。

1974年、灰塚にダムができることになり、灰塚の町に住む人たちは、新しくできる「のぞみが丘団地」に引っ越しをすることになりました。そして、灰塚の町は、ダムの底に沈むことになりました。「えみきじいさん」も一緒に。

ある日の夕暮れ、「えみきじいさん」のところへおじいさんが、孫の高志を連れてやってきました。

おじいさんは、「えみきじいさん」に話しかけました。

『えみきじいさん』、今日はお別れにきたんだよ。明日、私たちも『のぞみが丘団地』に引っ越すんだ。」

高志はおじいさんに、

「どうして、この木にお別れにきたの？」

と聞くと、おじいさんは、

『えみきじいさん』にはたくさんの思い出があるんだ。私が子供のころの夏休みには、毎日川で遊んでは、『えみきじいさん』の木陰で休ませてもらったんだ。大人になって、長い間遠くの町で暮らして、この町に帰って来た時、『えみきじいさん』の姿を見てどんなにうれしかったか。ああ、やっとこの町に帰って来たんだとほっとして涙がこぼれたものだよ。『えみきじいさん』は、あのころから少しもかわらないなあ。高志にも『えみきじいさん』との思い出を少しでもつくってもらいたくて、一緒に来てもらったんだよ。」

おじいさんは、「えみきじいさん」をなでながら言いました。

「ダムに沈む町に『えみきじいさん』を残していくのは残念で仕方ない。『えみきじいさん』、長い間本当にありがとう。」

おじいさんは、何度も何度も「えみきじいさん」をなでました。

高志は、おじいさんのその様子をじっと見つめていました。その時、風がそっと吹き、「えみきじいさん」の枝をやさしくゆらしました。

のぞみが丘での新しい生活が始まったある日、おじいさんは

「残してきた『えみきじいさん』をのぞみが丘に引っ越しをさせようという話があるんだ。これからその話合いに行って来るよ。」

と、とても嬉しそうに出かけて行きました。

のぞみが丘団地の真ん中には公園がありました。みんなが集まる公園になるように何かを作ろうという計画がありましたが、その公園に「えみきじいさん」を引越させようという意見が出たのです。この意見にみんな大賛成でした。しかし、もう500歳の「えみきじいさん」は、引越しをすると枯れてしまうかもしれないのです。

引越しの話を聞いた高志は、
「枯れてしまうかもしれないのに、植え替えても意味がないじゃない。公園なんだから遊ぶものとかの方がいいんじゃない。」
と言いました。するとおじいさんは、
「いや、町の真ん中にある公園だから『えみきじいさん』でなくてはいけないんだ。」
ときっぱり言いました。高志は、
「でも…。」と言いかけてましたが、それ以上は言うことができませんでした。

町の人たちの意見はすぐにまとまり、「えみきじいさん」の引越しが決まりました。
そして、いよいよ「えみきじいさん」の引越しの日になり、高志はおじいさんと一緒に引越しの様子を見に行きました。

公園に運ばれてきた「えみきじいさん」は、引越しをするために枝をすっかり切り落とされていました。幹だけになった「えみきじいさん」を見た高志は、（今までの「えみきじいさん」じゃあないみたいだ。町の人には、こんな姿になっても「えみきじいさん」に町の真ん中の公園に引越させたいのかな。）

そう思っていると、となりにいたおばあさんがつぶやく声が聞こえました。
「頑張っておくれ。『えみきじいさん』。」
おばあさんは、祈るように何度もつぶやいています。引越しの様子を見に来ていた人たちもみんな同じように「えみきじいさん」の引越しを見守っていました。

（「町の真ん中に『えみきじいさん』を植えたい…」と思っていたのは、おじいちゃんだけじゃなかったんだ。）高志は、引越しを見守る町の人々の姿をみて、胸がじんと熱くなりました。

引越しが終わり、幹だけになってしまった「えみきじいさん」は、川辺に立っていた時の姿とは違いました。でも、「えみきじいさん」を見上げるおじいさんも町の人たちも笑顔でした。「えみきじいさん」も、町の人々の笑顔に囲まれ、うれしそうに見えました。

高志も、いつの間にか笑顔で「えみきじいさん」を見上げていました。

次の日、学校で先生が聞きました。
「灰塚の町も学校も新しくスタートをしました。新しい町や学校で自慢したいことは何ですか？」
高志の心の中には町の真ん中にどっしりと立った「えみきじいさん」のことが、一番始めに浮かびました。高志は、笑顔で元気よく手を挙げました。